

秋季公開講座を開催しました

令和7年11月29日(土)、お茶の水女子大学アカデミック・プロダクション 寄附講座教授 宮里 曉美先生を講師にお迎えし、「秋季公開講座」をWEBで実施しました。テーマは、「子どもの主体性を引き出す保育 ～園・家庭・地域のつながりのなかで～」で、「遊びの中の学び」「人が育っていくために欠かせない大切なこと」「保育の中で大事に思い続けていること」「お茶大こども園の暮らしの中で見つけた幸せ」などについてお話いただきました。以下に研修での学びや研修で出された質問等についてまとめてみましたので、今後の保育の参考にしてください。

<研修から学んだこと>

- 子どもがし始めたことを大切にするのは保育の基本的な構えとして大切に、命に関わることでなければ、見守り、肯定し、ともに味わい、一緒に生きることが大切である。また、子どもが物事に取り組める時間と場所、仲間、一緒に驚く・面白い大人がいればその探究心も深まっていく。
- 幼児期にとって遊びが大切。遊びこそ学びには欠かせない。しかし「～させなきゃ」「のびのびやらせなきゃ」という思いや、雰囲気、つまり創造的になるように求める圧力は、創造性を妨げてしまう。遊びとは何か? その答えは簡単ではない。何かやりたくなる、触りたくなる、そんな環境を与えることで、子どもが遊びを見つけていく。その過程が大事になる。
- 私が大切に思い続けていること5つ→①子どもは「自ら」育つ②子どもは見て触れて、遊んで感じる③子どもは「探究」する④子どもは「没頭」する⑤子どもは「今」を生きている。園内研修等でこの5つのキーワードを入れて保育者同士で考えたりすると、これまでとは少し違う会話ができるのではないか。これからの予測できない未来を生きていく子ども達には、主体的に向き合って関わり合い、その過程を通して一人一人が自らの可能性を最大限に発揮し、よりよい社会と幸福な人生を自ら作り出していく事が重要。



<今後に生かしたい事>

- 宮里先生の話聞きながら、自分自身の保育を振り返ると、子ども達の遊びにどうしても声を掛けてしまいがちだと気付きました。遊びの中に学びがある。子ども達はたくさんのことを考えながら遊びをしているということを思うと、安易に声を掛けず、時にはそばで子どもの様子、行動を見守り、どんな遊びも受け入れるようにしたいと思いました。
- 保育者自身が安心の輪の中で保育すると、おのずと子どもたちへの安心の輪も出来やすいと思いました。子どもたちが自分の感受性を最大限発揮するには安心の輪が不可欠です。また「おいしい」は、幸せそのものという言葉も自身の体験や子どもたちとの保育でも一番実感しているところですが、言語化していただいたことにより、改めて確信しました。「食」についてはどのように体験するか、どんな意味があるのかという所についつい目がいてしまいますが、シンプルに「おいしい」という幸せを子どもたちと共有する、一緒に感じるということがいかに大事なことが再認識しました。「おいしいね」を共有していける、そんな実践を積み重ねていきたいです。
- 「その子なりの理由がある」と言う事が心に残りました。そういう考えは子どもをわがままにすると

子どもは「自ら」育つ



子どもは、生まれたその時から、主体的な存在。誕生のその時に「産声をあげる」ように。

子どもの傍にいて、子どもは「自ら」育つ、ということを繰り返し実感している。



という考えの人にも会いましたし、特に診断名がついている子や、集団の中で目立ってしまう子に対し、大勢に合わせるような風潮もまだありがちです。自分にも迷いはあるけれど、その子なりの理由に心と耳を傾け、安心の輪や、生き生きと過ごせる環境作りを考えていきたいと思いました。

〇年長児の担任をしているのですが、自由遊びが出来ず一人でぼーっとしている子どもがクラスにいます。わたしはその姿を見守ることが多く、時には遊びを提供したりすることがあるんですが、自然を見ていたりアリなどの生き物を捕まえているお友だちを見て喜ぶ姿、お友だちが遊んでいる所を見ていたり友だちに遊びに誘ってもらい遊ぶ姿があります。【遊ぶ】は、しなくてはならないものではない。遊びたくて遊ぶのが子ども。【見ている】【ぼんやりしている】もあり。【遊ばない】も含んで【遊ぶ】を大事にしたいというお話を聞き、これまで援助の仕方に悩んでいましたが、見守ることを意識し、子どもたち同士のやり取りや遊びたいという気持ちを大切にしていきたいと思います。

<宮里先生への質問と先生からのメッセージ>

*研修でチャットに書き込んでいただいた質問やレポートにお書きいただいた質問にお答えいただきました。保育実践での参考となる内容と思いますので、お読みください。

何か活動をする時に集中させるため子どもたちの姿勢や聞く準備ができてからお話するねと対応してきましたが、それが子どもたちにはストレスになっているのではと考え悩むことがあります。園全体でも話を聞く時の姿勢、環境等を大切に見ていく、身につけていけるようにという方針があるのですが、そういった時はどうしていますか？

→「聞く姿勢や聞く準備ができれば話をする」という呼びかけは、あまりしません。「みんなに伝えたいことがあるから、聞いてね」とは言いません。「聞く」と言うことは、まさに主体的な行動だと思います。「みんなに話す」場を作った場合は、「みんなに聞いてほしい」と願います。「聞きたい人だけ聞いてね」ではないので、みんなに向けて話します。「保育者の話を聞く」体験は大切です。そのために、「子どもたちが聞きたくなる話をする」ことが必須だと考えます。思わず聞きたくなる話を、静かに、しかし、魅力的に始めれば、子どもは集中して聞き始めます。子どもたちが集中して話を聞いていられるのには、時間と内容、場の雰囲気などが絡みます。具体物を用意する。話の展開をわかりやすくする。途中、子どもたちに質問するなど、いろいろ工夫します。また話を聞く場所も重要です。少し奥まった場所だと集中しやすいことがあります。椅子に座って聞くのか、床に座って聞くのか、丸く座るのか、どうするのか。いろいろやってみるのをお勧めします。何がその子たちに「ピッタリ」なのかは、やってみないとわからないので、それらのことを工夫して、「聞いている時の子どもたちの様子」「子どもの表情」「子どものつぶやき」に注目してほしいと思います。

自由遊びで、どの程度約束は必要ですか？

→「どのような事が約束になっているのか？お茶の水女子大の園では、1つ1つ約束が決まっているのではなく、何か起こった時に〇〇はこうしようねとしていて、全部約束を決め遊んではいない。よっぽどの事があれば、全体の場でみんなに伝えるけれど。大人は最初に何か約束をして遊び始めるという感じがあるが、それぞれの遊びのコーナーに、それぞれの子どもの遊びができる環境を準備しておけば、あまり約束で始まる事は少ないと思う。また保育者に子ども達の様子に合わせて保育を組み立て直せるようにできるかどうかもある。ちょっと困ったなという行動を子どもからのサインと受け止め、「もう少し開放的な場所に移ろうか」とか。また「この場所では走りません。」と言っておいて

もそれを越えた行動が出た時には、それをその子からのサインとして受け止め対応してあげる事で、その子の行動が満足される。そうすると、結果的には約束が守られたという事にもなる。私が保育者をしてきた時、遠足のしおりを作成していた時に、「〇〇はしません」と約束を書いていました。（例えば一人でどこかに行きませんか）しかしこれは違うなと思ったんです。そこで遠足に行ったら絶対やって欲しいこと、例えば「いっぱいみつける」「自然を感じる」などを書くようにしました。約束と言うと注意事項のように思ってしまうが、願いと思うと〇〇をしようになる。また、よく園には手洗い方法などが貼ってあるが、それができるようになったら貼っておかなくても良いのではないかな。1年間の中で子どもは成長し、生活も成長するので、子どもの様子に合わせて見直す必要があるのではなか。

- ①冒頭の遊びの持つ特徴の中で「遊びは能動的、集中的でストレスのない状態で」とありますが、集団遊びの中で、ルールを守ることが難しい子や理解が苦手な子、勝敗にこだわりがある子は、集団遊びはストレスになるのかと悩むことがあります。どう進めていったら良いでしょうか。
- ②安心感の輪の中で、保育者ができることとしての『必要な時は、毅然と対応しよう』ということですが、具体的にどんな時でしょうか。

- ①参加することがその子にとって大きな育ちにつながるとか、その子が参加したがっている時は良いが、こだわりのある子のように参加することが難しい子の場合、多様な参加の仕方やその場の雰囲気や味を味わう参加でも良い場合がある。参加の仕方の多様性を広げていくことが重要。実はこういう場合に1番ストレスを感じているのは子どもではなく、保育者の方である。
- ②毅然と対応することの私の理解は、たとえば子どもがピアノの上に乗っていて危険な時は、「それは違います」と子ども対大人の対応をするというのが、私の理解です。

素材と材料の違いや用意するにあたっての心がまえなど詳しく知りたいです。

*素材：それに触れて、何かを感じ、それを生かして、何かを表現することが期待されるもの。多様、季節に応じている、身の回りにあるもの、リサイクルのもの など

*素材と材料の違い

「素材」は加工前の「原形」をとどめているもので、「材料」は素材を加工して、特定の用途に使えるようにしたもの。例えば、石や木は「素材」、それらを加工して作られた石材や木材は「材料」。材料はさらに加工されて最終的な「製品」になる。

*レッジョ・エミリアの教育では、「素材」は「マテリアル」と呼ばれています。以下、そこでの考え方のいくつかを紹介します。

<レッジョ・エミリアの教育における素材について>

—素材のいろいろ—

○自然素材：葉っぱ、石、枝など、身近な自然から得られるもの

○日用品・廃材：

○段ボール箱：厚さや強度の違いが、子どもの探求心を刺激

○ガラス繊維：クッキングシートや電気配線にも使われる、耐熱性の高い素材

○その他：布、紙、紐、糸、ボタンなど 様々

—素材との関わり方—

*「多様性」と「探求」を重視

→レッジョ・エミリア教育では、特定の素材に限定せず、様々な素材を提示します。子どもたちはそれらを「探求」し、独自のアイデアを形にするプロセスを経験します。

*「素材そのものの特性」を活かす

→素材の特性（例：ガラス繊維の丈夫さ、段ボールの強度）を理解し、それらを創作活動に活かすことを重視します。大人は「サポート」に徹する。大人が「作り方」を教えるのではなく、素材を提示し、子どもの表現を見守り、必要に応じてヒントを与えることで、子どもの「自ら考え、解決する力」を育

みます。

刺激に弱いお友だちが増えている中で、保育室は刺激は少ない方が良いと言われていています。しかし、私たちの園は、収納や空き部屋のスペースが無いので、どうしても部屋がごちゃついてしまい、刺激の多い部屋になってしまい、いつも好きな素材をすぐに取り遊べる環境づくりに難航しています。収納が少ない部屋、オープンスペースの幼稚園の空間の中で、いつも素材を手に取り遊べるようにするためにどんな工夫ができるのか、どんな提示の仕方ができるのかを知りたいです。

「刺激に弱い」というよりは、「刺激に対して敏感」ということのように思います。こちらが伝えようとしているもの以上のものを受け止めてしまう子どもたちなので、気をつけたいと思います。そのために、私が心がけることは以下のようなことです。

- ① 物を収納するカゴは、色のない物（白、半透明、黒）にする。 → 視覚情報の整理
- ② 壁面はスッキリとさせる。（いわゆる壁面制作ではりきらない） → 視覚情報の整理
- ③ おもちゃをごちゃごちゃに入れず、取り出しやすくする
（おもちゃを探すためのガチャガチャ音をカット） → 音刺激の整理
- ④ 机の上で遊ぶ→ 絨毯の上で遊ぶ → 音刺激の整理
- ⑤ 小さな箱を組み合わせて、種類別に素材を入れる → 視覚情報 触覚情報の整理

机や小さな棚の位置を動かしたり、ダンボールなどを使い小さな区切りを作ったりすることで、室内に小さなブースを作り出します。

そして、何より、保育者の声の大きさや内容が、空間の色合いに影響します。

大きな声、指示と注意する声飛びかう環境は、「刺激に敏感なお子さん」にとって、とても落ち着かない要因になります。

安心できる居場所を作ることも大事な要素です。

ゴロンとできる場所などを作れるといいですね。

また、自然素材（落ち葉、木の枝、柑橘類の輪切りなど）を保育環境の中に位置付ける（そっと飾る）と、部屋の雰囲気柔らかくなります。



友だちに対して、手が出る子どもとの関わり方、またその保護者に対する対応について
→言葉での理解がまだまだ難しい年齢（0歳～2歳児）の子どもが、他児に対して、手が出てしまう時の保護者への対応の仕方
→玩具の取り合い等、理由が明確に分かる場合と、何も無いが手を出してしまい、理由がよく分からない場合、また手が出てしまう子の保護者への伝え方

保護者への対応については、「困った」ことが起きた時を出発点とした関わりは、なかなか難しいですね。そうではなく、日常的な関わりが大切になってきます。つかみ合い、噛み合いなど、トラブルになった時は、まず患部を冷やすなどの対応をします。また、できる限り未然に防げるように対応もします。そのような関わりを重ねた上で、保護者には、そのような事態が発生した状況と、対応、今後気をつけることなどを伝えていきます。

友達への関心が芽生えてきている、自分の思いを表そうとしてきている、など、プラスの意味を伝えつつ、ケガに至るトラブルは避けられるよう、近くで見守ったり、援助したりすることを伝えていきます。

子どもへの対応については、相手に危害を加えそうな気配をとらえて制止するなどの対応をしつつ、「どうしたかったのかな?」「～だったのかな?」と気持ちに着目した言葉掛けをしていきます。

また、一つのおもちゃに殺到するなど、環境面に課題がある時には、環境の見直しをしていきます。

本年度新人の保育士の指導担当をしています。しかし、その保育士に対してどのように、どこまで伝えるべきか迷うことがあります。

→新人の保育士に活動のねらいや、日々の保育の流れを伝えた際に、意図する内容がうまく伝わらず、ねらいが共有できない。また、活動に向けての下準備等を伝えると、その時は出来るが、次に繋がらず、毎回伝えないと動けない場合があり、どう伝えたら良いか迷う。「細かく伝える」の細かくは、一体どの程度までの細かさでなくてはならないのでしょうか。

新人の指導担当は、なかなか難しいですね。新人の指導担当者の方の相談相手は必要ですね。とても難しい役回りなので。そして、とても大切な立場なので。

私が新人の頃には、主任の先生や同僚、園長先生が、指導してくださいました。特に担当者は決まっていりませんでした。みんなが心にかけてくれていたように思います。

そのころに、月一回の研究会で、一人抽出児を決めて、その子について語り合う研究会がありました。そこで、経験を積んだ先生たちが話されることがとても興味深かったことを覚えています。

自分の拙い保育についての話題だと、しどろもどろになったり、自己嫌悪に陥ったりしがちなのですが、子どもの姿に焦点を当てた語り合いだと、学びの方が強かったです。人によるかもしれませんが、子どもたちは「若い先生」が大好きです。私は、そのことを新人保育者に伝えて、あなたの良さをたくさん発揮して、いっぱい遊んで、いっぱい感じてね、と声をかけています。1年目って、今しかないのです。

宮里先生のお話には、受講された先生方にとって日常の保育実践と重なる内容が多くありました。そのせいか講義の後の質問や感想では日々の保育での困り感や感じていることにふれた内容が多く聞かれました。今回研修で出された質問や受講後のレポートに記載のあった質問への回答を紹介させてもらいました。ここにあげた質問は、恐らく多くの先生方も思われたことのある内容ではないかと思います。コロナ対応から研修の多くがオンラインに変わり、研修に参加された先生方が、自分の保育に関わる思いを語り合える機会が減っています。今後働き方改革という視点からこの傾向は続くのではないかと思います。しかしそれだけに、保育現場での保育者同士の「語り合いの機会」が重要になっていると感じます。宮里先生よりお伝えいただいた、5つのキーワードを生かした園内研修を取り入れ、まず身近な先生方同士で考え合う機会を工夫してみたいですね。

(専門員)